

ファミリー・グループにおける経年参加児の体験と その内在的な仕組みに関する一考察：日常の支えに 焦点を当てて

新村，信貴
九州大学大学院人間環境学府

古賀，なな子
福岡県立大学人間社会学部

<https://doi.org/10.15017/7177896>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 15, pp.49-55, 2024-03-15. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



ファミリー・グループにおける経年参加児の体験とその内在的な仕組みに関する一考察

—日常の支えに焦点を当てて—

新村信貴 九州大学大学院人間環境学府 / 古賀なな子 福岡県立大学人間社会学部

要約

本研究は、日本における子育て期の家族のエンカウンター・グループであるファミリー・グループを対象とし、これが経年参加児の日常の支えとなるという点に焦点を当てた。そして、①参加者の特徴、②日常の支えの特徴、③その元となる体験内容と、グループの内在的な仕組みについて検討し、このグループの臨床心理学な理解の一助となる知見を得ることを目的とした。①親は子育てが始まる以前に、エンカウンター・グループに何らかの接点を持っている場合がある。②グループは子どもにとって、自身が深く受け入れられる一つの世界として生活に位置づけ、日常の支えを生む。③その元となる体験内容とグループの内在的な仕組みに、次の点がある。非日常的体験を生む環境設定と、親子間へのスタッフの介在。自然環境下の子どもの解放的体験や挑戦と、行動を共にし、種々の習慣をリードをするスタッフの存在。他者尊重の態度の内在化や、人に会うこと自体の価値体験といったパーソンセンタードのエンカウンター・グループの特徴的体験と、それを可能にする、経年参加者との再会、自由な時間的枠組みと施設設備、及びそこで生じる種々の習慣に内在する言語的コミュニケーション等の要素。

キーワード：ファミリー・グループ、エンカウンター・グループ、パーソンセンタード・アプローチ

1. 問題と目的

1. コミュニティ・アプローチとしてのエンカウンター・グループと家族

心理臨床において「コミュニティ」とは地域のみを意味せず、そこには共通の規範や価値、関心等の共有からなる心理社会的な場も含まれる（植村，2007）。これに基づく心理臨床の例に日本では人間関係研究会等によって実践される、エンカウンター・グループがある。エンカウンター・グループは、「人間性心理学の立場で個人の成長や人間関係の体験そのものを目的として行われる各種のグループ体験の総称」（金子，2018）であり、同研究会はRogersの立場のエンカウンター・グループを通じた「安全な雰囲気の中で成長し合う人間関係の研究と実践を目的」（人間関係研究会，2023）にRogersの元に留学した畠瀬稔・直子を中心に1970年に組織された。エンカウンター・グループは一般的には個人を対象とする一方、1960年代頃の米国には家族を対象にした例が存在したとされる報告があるが、同報告には引用元の文献が付記されておらず、実態は明らかでない（Rogers, 1970/2007；畠瀬稔，1972）。しかし同時期、米国に複数の家族を対象にした家族療法（Laqueur et al., 1964）や、教会等で開催された成長グループが存在し（Anderson, 1974）、当時米国で広範なグループがエンカウンター・グループと称された経緯（村山，1977）をふまえると、これらがエンカウンター・グループと称された可能性もある。また教会はエンカウンター・グループの流行後、その技法を宗教体験に取入れたという指摘（Yalom, 1995/2012）を裏付ける様に、現在もキリスト教の団体がencounterという言葉を用い、家族対象のワークショップを開催している例がある（Bukas Loob Sa Diyos, 2023）。

2. 日本における「ファミリー・グループ」と、その対象・目的・構造・習慣・運営の方針

一方、日本では家族対象のエンカウンター・グループとして「ファミリー・グループ（以下、FG）」と呼ばれる固有の実践が存在する。これと上述の1960年代頃米国で発展した種々の家族のグループとの関係は不明であるが、畠瀬稔・直子が1969年日

本にエンカウンター・グループを導入した後、1977年に家族が参加できるものとして始めた（水野，2011）。畠瀬稔の逝去後も「ファミリー・グループ研究会」が運営し、毎夏の盆休みに3泊4日で開催される。対象は原則3歳～高校生までの子どもと家族35名までで、親がエンカウンター・グループに関心を持ち参加する例が多く、障害や何らかの不応のエピソードがある家族と、そうでない家族双方が参加し、経年参加者の割合が高い（畠瀬ら，1994）。また、参加者の成長と、グループ体験そのものが目的とされる（ファミリー・グループ研究会，2009）。

FGは自然豊かな過疎地（畠瀬ら，1994）の宿泊施設を貸切り、開催される。その特徴は確定したスケジュールが最小限で、参加者で希望を出し合い、自然体験やグループセッション等をサブグループに分かれ、体験する点にある。初日昼に「始めの会」が開かれ、自己紹介と過ごし方の希望が共有される。2～4日目の朝、各日の過ごし方の希望が共有される「朝の会」、4日目昼の「終わりの会」、1～2日目の夜にスタッフと希望の親が集まる「ミーティング」、2～3日目夕方のカレー作りとバーベキューの他は、確定したスケジュールがない。原則1家族1つの個室があり、親子はサブグループに参加せずに個室で過ごす自由も含め、これらに自身のペースで参加する。スタッフは臨床心理士や大学生等が務め、運営を担う2～3名のコアスタッフと、数名のボランティアスタッフから構成される。スタッフは各会や各サブグループのファシリテーション、子どものケア、次に述べる「習慣」のリード、子どもと親の分離のサポート等を担う。FGには構造と呼べない水準の多くの場合サブグループ化を含む「習慣」がある。川遊び、魚釣り、山登り、虫採り、園側でスイカを食べる、花火、肝試し、温泉施設利用等である。また昼夜問わず、親と子はそれぞれにサブグループを形成し、子どもは就寝場所でもある大部屋で自由に遊び（カード・ボードゲーム、風船・ボール遊び等）、親は、親子共に出入り自由で、スタッフが常に誰かしら居る、スタッフルームで会話する姿がよく見られる。多くの時間、親子は分離しているが、同時に緩やかな大集団が維持されることとなる。

FGはRogersのパーソンセンタード・アプローチ（以下、PCA）により運営される。例えば、制限や規則を最小限にし、参加者の自由を最大限保障する（畠瀬ら、1994）、一人ひとりの存在が生かされる（畠瀬、1986）、緩やかな凝集性を保ったコミュニティであることで、そこでの「ほとんど唯一のルール」は「個々の存在が他者からきちんと尊重されること」であり、スタッフはこの価値を共有し、そこから生まれる雰囲気、文化の中に参加者を包含することで、参加者は自分が尊重され、受け入れられることの実感をもって、このルールを内面化していく（ファミリー・グループ研究会、2006）、等の方針に現れる。他にも運営においては種々の習慣をリードする力もある程度求められるが、これが本質ではない（ファミリー・グループ研究会、2006）。尚、スタッフの子どもへの関わりも、PCAのプレイセラピーの原理に基づくこととされる（畠瀬ら、1993）。

3. FGの先行研究 ―参加者のエピソードとFGが有する「要素」

畠瀬ら（1994）は、参加者へ面接調査を行った。見られるエピソードは次の様に整理できる。親には我が子に発見をする他、我が子への関わりや自家族、自分自身について気づきを得た事例がある。子どもには自信の獲得や、集団参加に積極的になったり、神経症的症状の改善が見られた事例がある。親子に共通して、FGから何らかの形で、日常を送る上での心の支えを得ていることが語られていたり、子どもはそれを言語化していないと、日頃FGの写真を携帯して過ごしている等、何らかの支えを得ていることが推察される事例がある。家族関係においては家族でFGが共通の話題となる、FGで歌った歌を日常で家族でも歌う、等のエピソードがあり、更に密着していた母子のFG内での分離体験が、FG参加後も維持されることとなったり、夫婦の会話が増えた等、関係の変化が見られた事例もある。

こうした肯定的なエピソードの背景にあるFGの仕組みについては、上保ら（1993）が「要素」として、3点を述べた。一点は「PCAを土台とするワークショップの構造」である。これは参加者の安心感、主体性を損なわずに、その人がその人らしくいられること、プレイセラピー的な自由遊びを通じ、自然の豊かな力を引き出すこと、最小限の予め決められたプログラムによって共同の体験やコミュニケーションを促進すること、ワークショップ形式によりピーク体験が可能になること、年に一度の同じ形態の開催によって、経年参加家族は成長と課題を確認できること等である。二点目は「自然の持つ治癒力」である。これは自然が人工物に比べ、自由で豊かな反応を引き出すこと、生の体験として大人も子どもも身体の中に残ること、前言語レベルの共有体験を可能にすること等である。三点目は「家族」である。FGでは大家族集団が形成され、スタッフが親子間に介在する。それにより、親は親役割パターンを放棄し、子どもとの関係の持ち方等が意識化され、自身に目を向けることができる。また自家族を他家族と比べ、対象化する。並びに家族の苦労や葛藤を共有し支え合う自助グループ的機能が果たされる。子どもには自由が与えられ、大家族集団の中、きょうだい関係・役割関係が拡大する。家族はグループ体験を家に持ち帰り、家族の共有財産・日常の支えとする、等とされる。

4. FG研究の課題と本研究の目的

この様に一定の資料は示されながら、FG研究には次の様な課題が挙げられるであろう。

1) 経年参加者の特徴の説明

FGは、その方法が不登校の家族キャンプに援用された例があるが（金森ら、1995）、それ以外の普及はしていない。しかし、40年以上参加者が絶えないことから、FGはこの社会に僅かながら存在する、ある特定の人々の何らかのニーズを満たしていると考えられる。FGを求め続ける人々の特徴を説明することで、この社会においてFGが果たす意義の説明に寄与できる可能性がある。FGの原則の参加上限は子どもの高校卒業までであるが、この様に上限まで経年参加した家族に焦点を当てることが、ここでは有用と考えられる。また経年参加の背景に、畠瀬ら（1994）は、子どもの熱心な希望があると述べており、子どもの体験には注目の価値があるだろう。

2) 「日常の支え」に着目した意義の説明

FGは組織キャンプの特徴を有する。組織キャンプの臨床心理学的研究では、思い出が子どもの生活の糧となる（串崎ら、2006）や、キャンプが経年参加児において、心理的居場所として内在化され、原動力を生む（木村ら、2019）等と、その意義が指摘され、FGでも上保ら（1993）が、参加者の「日常の支え」を挙げる。しかし心理療法で行われる作業とは、そもそも「心の支えを回復し、深めていくこと」（串崎、2001）であり、「日常の支え」はFGに独自の意義ではない。だが年に一度限りの3泊4日の体験が、どの様な形で「日常の支え」を生むかを明らかにすることで、その意義に接近出来る可能性がある。心の支えについて多面的考察を行った串崎（2001）は、「自分がなにかによってなんらかの形で支えられていると感じていること」を「心理的支え」と定義した。しかし同時に串崎（2001）は、「支え」が、曖昧で多様な意味を含む言葉である故の定義の難しさに触れ、更に、支えられていることを感じているという視点だけでなく、それを欲しているという視点からも捉える必要性を指摘した。この点を鑑み、本研究ではFGによる「日常の支え」を「FGから日常を送るうえで支えを感じた体験、あるいは日常を送る為にFGを欲した体験」と定義する。

3) 「日常の支え」の元となる参加者の体験内容と、それを生む内在的な仕組みの説明

畠瀬ら（1994）では参加者のエピソードが、上保ら（1993）ではFGの仕組みが「要素」として述べられたが、未だ、時間・空間・周辺環境等の種々の構造、またその中で生じるサブグループ単位での体験を含む、構造に満たない水準の種々の習慣、並びに、スタッフや参加者同士の関わり等、これらの説明は未だ充分でなく、今後より詳細な説明が必要である。参加者の「日常の支え」体験の元となる、グループの体験内容を検討することから、FGの意義に関わる、体験内容とそれを生むグループの内在的な仕組みの説明が可能になると考えられる。

また、畠瀬ら（1994）では複数事例が掲載されながら、その比較検討は充分ではなく、FGの意義の説明は、グループ内で生じる「愛他的関係」や、参加者によってそれぞれ個性的に意味がある、という点が強調されるに留まっていた。今後は、事例に見られる共通性を考察することで、上記3点について、傾向を示すことが求められるだろう。以上より本研究では、FGにおける経年参加児の体験した「日常の支え」に注目し、1) 参加者の特徴、2) 日常の支えの特徴、3) その元となるFGの体験内容の特徴、という観点から事例を理解しつつ、FGの内在的な仕組みを考察し、FGの臨床心理学的な理解の一助とな

る知見を示すことを目的とする。

II. 方法

第一著者はZ年より9年間スタッフとしてFGの運営・実践に携わり、参加者（7家族、親8名、子ども8名）から研究協力を得てきた。この中からFGに高校卒業まで参加し、調査の中で、上述の「日常の支え」及び、FGの具体的な体験内容（時間・空間・周辺環境等の種々の構造、またその中で生じるサブグループ単位での体験を含む、構造に満たない水準の種々の習慣、並びに、スタッフや参加者同士の関わり、いずれかを含む）が関連づけて語られた2名の子どもを選定した。

1. 調査方法

Z+1年の時点で第一著者が、子どもの高校卒業まで経年参加を経た3家族に面接調査を実施した。まず家族ごとに90分程度のグループ面接を実施し、家族のこれまでのFG体験について、初参加時から振り返ってもらい、教示した。その後、別日に60分程度の個人面接を、親と子どものそれぞれに実施し、家族グループ面接で得られた体験談を紙面に示しながら、更に各時代の体験について、より詳しく尋ねた。面接の内容はICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。

2. 分析方法

選定された2名の子どもの個人面接及び、家族グループ面接の逐語録を第一著者が分析した。1) 子どもの初参加からZ+1年までのFG体験及び、当時の日常の様子について時代ごとに要約した年表を作成し、全体の内容を把握した。2) 逐語録から先に定義した「日常の支え」を抽出し、要約した。3) 子どもの成育歴や家族生活の様子、参加経緯、「日常の支え」が体験された時代の日常の様子を抽出し、要約した。4) 「日常の支え」の内容との関連性が示されている、FG体験の具体的な内容（何歳位の体験かが分かり、かつ時間的・空間的・環境的構造、その中で生じるサブグループ単位での体験を含む、構造に満たない水準の種々の習慣、他参加者やスタッフとの関わり、いずれかの情報を含む）を抽出し、要約した。5) 上記の抽出・要約に基づき、逐語録の再構成を行い、二事例の記述を得た。6) 二事例の記述と対応する要約箇所が記された逐語録を、第二著者が読み、要約と再構成の妥当性について検討し、必要に応じ二者で協議の後、修正を施した。考察では二事例の比較と共に、内在するグループの仕組みを検討した。

3. 倫理的配慮及び著者と研究協力者との関係性

Z+1年時点での、第一著者の所属機関の倫理委員会の審査を経た。研究協力の自由と途中での協力中止も可能であること、及び個人情報保護について、紙面を用いて説明を行った後、親と子どもそれぞれから承諾を得た。Z+1年時点で、二事例の子どもは、高校卒業後にスタッフとしてFGに参加をしており、その親もFGに参加していた。よって研究協力者と第一著者は研究協力依頼に先立ち、関わりを持っていた。尚、これに対して第二著者は、FG及び研究協力者とは関わりがなかった。

III. 結果

1. A家の長男Bの事例

1) 参加者の特徴

A家は母（50歳代、福祉関係）、父・姉（研究協力依頼せず）、B（20歳代、大学生）、妹（10歳代、高校生）の5人であり、父

以外全員がFGに経年参加した。母は以前より人間関係研究会の個人のエンカウンター・グループに参加をしており、子育てが始まってからは子どもを預けず参加できるものとして、FGに参加するようになった。Bは保育園年長で初参加した。学校の保護者面談でBは「いつも一人です」と言われ、母は心配をしたが、実際にBは日常で他児と関わることや遊ぶことが少なく、小5の転校時にはいじめに遭った。母によれば家庭でBは「自分を出せ」ず、B曰く特に高校時代に父と関係が悪く、また話す相手が家庭に居なかった。過去に父がFGに参加を検討した際、母曰くBは、父が「来るんなら俺は行かない」と言った。

2) 「日常の支え」の特徴

Bは初参加からZ+1年までのFG体験を「病気でも、受験とかあっても、就活とかあっても、必ず行くっていう感じの世界だった。帰るっていう感じの世界だった。」と、自身にとってFGが必要なものであったと意味づけた。この体験は特に父との関係が悪かった高校時代に強く体験された。中学からFGに「帰ってきた」感覚が生まれ、高校では「もう一つの家族に会いに行く」「もう一つの家に帰る」と、その感覚がより大きくなった。この背景としてBは「みんなが今の自分の家族以上に受け入れてくれる」という体験を挙げた。またBは経年参加体験全体を通じてFGを「安全な場所、安心できる場所、自分を傷つけるものがない感じだから。のびのびできたところがあったのかな」とも意味づけ、振り返った。

3) その元となるFGでの体験内容の特徴

(1) 解放的体験と、年少児に魚釣りや虫採りを教える体験

保育園年長でFGに初参加したBは初めての魚釣りを楽しみ、小学校進学後もこれを楽しみにし、腕を上げた。更にBは「何ものにも束縛されないで、はっちゃけ」ていた（B談）、「いつものBじゃなくなって」「自然体でいれた」（母談）と日常と異なる解放的な姿を見せた。スタッフと共にイモリを20匹捕まえて「チュー」をし、「連れて帰る」と主張した事もあった。Bは小学校高学年以降、かつてスタッフから教わった魚釣りや虫採りを年少児に教える様になり、「ちっちゃい子見てやって」（誰の発言かは不明）、「Bどうやんの教えてよ」（年少児）とそれを求められた。自分の好きなことを年少児に教える経験は日常になく、Bは楽しかった。これをBは「学校よりも学校らしいこと」や、「人間関係」を「自然体で教えられてた」と語った。

(2) 「人に優しくなれた」「自分に自信が持てた」体験と、経年参加家族との関わり

小学校高学年からBにとってFGは「人に優しくすることの大切さ」を感じる場となった。Bは経年参加体験全体の意味を「人に優しくなれたんじゃないかな」とし、更に小5でいじめに遭うも、FGを通じ、乗り越えた体験を語った。日常で他児と関わる機会の少なかったBは、FGでは「みんなが受け入れてくれたから、優しくなれたし、自信もつけられるようになって。尊重してくれたから、自信が持てたのは大きいかな」と、スタッフ、他家族の父母、他児と遊んだ体験や、またバーベキューで経年参加する他家族の父等に相談をし、アドバイスをもらった体験を挙げた。これらの体験から「色んな人によくしてもらって、色んな勇気もらって、人に優しくなろうって気持ちが意識的になった」と、「いじめも乗り越え」、更に「ケンカをしなくなった」と語った。また特に父と関係が悪く、話す相手が家に居なかった高校時代、FGに対して「もう一つの家族」とい

う感覚が強まったBは、小5で相談に応じた他家族の父のことが「大好き」(母談)で、「あの人がうちのお父さんだったら」と思った(B談)。そして「もう一つの家族」体験の背景にBは、当時参加メンバーが概ね決まっていたという点を挙げた。

2. F家の長男Eの事例

1) 参加者の特徴

F家は父(50歳代、医療関係)、母(40歳代、心理職)、E(10歳代、大学生)、妹(10歳代、高校生)の4人で、全員がFGに経年参加した。参加経緯としては、元々母がFGのスタッフをしていた点があった。母の記憶ではEの初参加は1歳で、母がスタッフとして参加した年の同伴であり、正式に4人で参加者として参加したのはEが6歳の年であった。4人にとってFGは「恒例行事」で、FGがあることで夏休みの予定を考えずに済んだ。一から旅行の計画を立てるならば、それぞれの希望が異なり、行き先が決まらず、外食に行くだけでも好みが異なり、店が決まらない。この様に4人の意見が揃わずとも、それぞれが好きな様に過ごすことができたのが、4人にとってのFGであったという。また家族でFG体験を振り返る中では、Eの体調不良のエピソードが頻出し、父の印象では、小学校までのEは喘息の既往があった等、身体が丈夫でなかった。

2) 「日常の支え」の特徴

小学生のEにとってFGは1年に4日しか存在しない「別の世界」で、Eは「普段の生活は一旦置いて」「現実を忘れ」、同年代他兄と共に、川遊びや山登り等「普段できないこと」、「遊びに没頭」し、「自分のやりたいことをひたすらやって」いた。この「別の世界」の存在はEに「それがあるっていう安心感」を生み、「すごい心の支え」となった。EはとってFGは「何かがあっても、それをこう受け止めてくれる場所」で「友達関係とかで悩んだりとかしても、ファミリー・グループ行ったら関係ないし、話してくれる人いっぱいいるし、遊べるし」等と、「余裕」や「過ごしやすさ」、「普段は普段で割り切れる部分」を生んだ。「心の支え」は小学生で特に強く体験され、日常で「楽しくやりたい様にできていた」中高時代には「ちょっとずつなくなっていくが、それでもFGによる「余裕」は残り続けた。

3) その元となるFGでの体験内容の特徴

(1) 「死ぬほどやってた」魚釣りと、父に心配されながらも険しい山道に挑戦した体験

小学生の体験を振り返る中でEは魚釣りを「死ぬほどやってた」と振り返るが、あまり記憶がなく、一方父は当時の様子を次の様に語った。Eと同年代他兄は、準備をしたスタッフと共に魚釣りに行くことが多く、はじめはなかなか釣れなかったが、初めて釣れた時に興奮し、それ以降のめり込んでいった。毎朝の様に6時にEは他兄と共に起床し、寝ている父に声をかけてから出掛けて行き、昼間他の参加者が水遊びをする間も、Eは他兄と魚釣りをしていた。

また小学校高学年のFGで、F家は他家族やスタッフと登山に行った。後半、山道が険しく、父母を含む多くの参加者が途中で下山を決めた。しかしスタッフが「何人かだけでも行こうか」と言うと、Eは同年代の他兄と共に登頂を望んだ。Eは途中下山する参加者に「みんな、え？ 帰るの？」「見てろよ」と思った。父母は驚き、Eに身体が丈夫でないという印象があった父は心配しつつEと別れた。その後Eは登頂し、スタッフは父にEの様子を伝え、父も「達成できて良かった」と感じた。

(2) 中学を境に、「人に会いに行」く、という意味が強まる

魚釣りや山登り等、「やりたいことをひたすらやっていた」EのFG体験は、中学を境に変化した。それまで別行動をとっていた同年代の男子と女子が、同じグループを形成する様になった。川や山よりも、宿舎で恋愛ドラマを見たり、「人狼(ゲーム)」を朝4時までしたり、布団にくるまり「恋バナ」や「怖い話」をしたり、それぞれが自分の県に何があるかや、学校生活等のそれぞれの日常の話をし、Eにとっては日常で話すことのない他兄とのこうした話が「ただただ楽しかった」。それまでEにとってFGは「年に4日間しか存在しない」「別の世界」で、参加者、スタッフ共に会おう人々は「3泊4日間しか僕の中には存在しない人」だったが、「誰が何県の人」や「普段の生活はこういうことをしている人なんだ」ということを知る様になり、徐々にFGとそこで会おう人々は、日常生活とつながりのある存在として感じられるようになっていった。こうした時間は多くは同年代の子どもだけで持たれたが、夜中は他に就寝した子どももいたことから、別室のスタッフルームでも持たれた。Eは自身のFG経年参加体験全体を「人に会いに行っていた」と意味づけ、同じメンバーが再会することに意味を感じていた。「人に会いに行」くというEの目的は、中学生以降に強く体験されながら、それ以前も含むFG体験全体に渡るものであった。

IV. 考察

1. 参加者の特徴 — 親のエンカウンター・グループとの接点

Bは父子間の葛藤を抱え、小5でいじめに遭い、育成歴全体で他兄との関わりが少なかった。一方Eにこれらのエピソードはなく、「日常の支え」のエピソードの中で、小学生時の「友達関係とかで悩んだりしても」という例はあるが、それ以外でこうした内容は見られず、Bと比較した場合には特に、目立つ日常での葛藤や課題はなかったと考えられる。しかし参加経緯に目を向けると、A家の母は過去に人間関係研究会の個人のエンカウンター・グループに参加歴があり、F家の母は元々FGのスタッフであった。FGにおいて、過去にも子どもを預けず参加できるエンカウンター・グループとしての参加ニーズが見られたが(畠瀬, 1986)、参加者の特徴として、親が子育ての開始以前に、エンカウンター・グループに何らかの接点を持っていた点が考察される。

2. 「日常の支え」の特徴 — 自身が深く受け入れられる一つの「世界」として

家族内の葛藤や学校で他兄との関係に課題のあったBと、それと比べ日常で特段の葛藤・課題のないEは共通して、FGから「日常の支え」を得ていた。BにとってFGはその経年参加体験全体を通じて「安全」で「安心」でき、「必ず行く」「帰るって感じの世界」であった。そして父子間の葛藤が強かった高校時代のBにとって、特にFGは「もう一つの家族」で、「みんな」が「自分の家族以上に受け入れてくれ」た。一方Eの「すごい心の支え」は小学生で強く体験され、FGはEにとって「別の世界」で、「何かがあっても」「受け止めてくれる場所」であり、それにより日常を「割り切り」、友達関係とかで悩んだりとかしても、ファミリー・グループ行ったら関係ないし、話してくれる人いっぱいいるし、遊べるし」と「余裕」や「過ごしやすさ」を生んだ。二人の間では「日常の支え」が強く体験された時期も、日常の様子も異なるが、自身の存在が深く受け

入れられる、日常と異なる一つの「世界」としてFGを体験していた点は、共通するといえるであろう。

3. 「日常の支え」の元となるFGの体験内容の特徴と、内在する仕組み

1) 非日常的体験を生む環境の設定と、家族と非日常的体験を両立する為のスタッフの存在

エンカウンター・グループは文化的孤島を会場に、合宿等の集中的実施が望まれ(村山, 1977), 組織キャンプでは非日常的な空間・時間・人間によって治療的雰囲気が作られる(申崎ら, 2006)。FGが自然豊かな過疎地(畠瀬ら, 1994)で開催される理由は説明されてこなかったが、FGが日常と異なる一つの「世界」として体験される仕組みの一つに、こうした非日常的体験を喚起する環境設定、即ち日常生活圏から離れ、合宿形式で集中的体験を持つ点が関係する可能性がある。しかし個人のエンカウンター・グループや子ども対象の組織キャンプと異なり、FGには家族という日常が持ち込まれる。だが二事例で親から見て、子どもに日常と異なる姿が見られたエピソード(Bのイモリ採り、Eの登山)を挙げると、そこでスタッフは子どもと行動を共にしていた。子どもに自由と親に役割からの解放をもたらすスタッフの介在(上保ら, 1993)は、家族という日常と同時に、非日常的体験を生じさせる役割を担うといえる。

2) 自然環境下の解放的体験や挑戦と、行動を共にし、種々の習慣をリードするスタッフ

スタッフの子どもへの関わりは、PCAのプレイセラピーの原理(畠瀬ら, 1993)による。Bから「家族以上に受け入れてくれる」、Eから「何かがあっても」「受け止めてくれる場所」等と、PCAの「無条件の肯定的配慮」を彷彿とさせる体験が語られたが、これは直接的なスタッフの関わりを示すものではない。だが、Bのイモリ採りのエピソードに見られた解放的体験や、Eの登山のエピソードに見られた挑戦の体験において、スタッフが行動を共にした点は明確である。またEのみにいえることだが、登山のエピソードでは「何人かだけでも行こうか」というスタッフの声掛けがEの挑戦の契機となり、登頂後もスタッフは父にEの様子を報告し、父に「良かった」と感じさせた。スタッフの親子間の介在は、親に役割からの解放と子どもに自由を与える(上保ら, 1993)だけではなく、子どもの体験の機会を上げたり、必要に応じて親に様子をフィードバックする点も含まれることが推察される。

尚、本結果から見られた、スタッフの具体的な子どもへの関わりは、魚釣り、虫捕りを教える(B)、魚釣りの準備をし、一緒に出掛ける(E)、険しい山道を子どもと一緒に登る(E)等の自然環境下の習慣に関するもので、ここではある程度の知識や経験が求められる。FGの内部資料では、これらの習慣をリードできることのある程度の必要性が記される一方で、FGの本質は「個々の存在が他者からきちんと尊重されること」であり、スタッフがこのPCAの価値を共有し、参加者を包含することの重要性が強調されている(ファミリー・グループ研究会, 2006)。しかしBとEの種々の体験は、魚釣りや山登りについてのスタッフのリードがなければ起こらなかったといえ、特に自然環境下の種々の習慣をリードできるスタッフの知識や経験は、FGの要素の一つとして改めて認められるべきであろう。

3) PCAのエンカウンター・グループに特徴的な体験とそれを生む仕組み

(1) 「みんなが受け入れてくれたから」「尊重してくれたから」

2人のFGの体験内容は、自然環境下の習慣のみではなく、Bは自身のFG経年参加体験全体の意味を「人に優しくなれたんじゃないかな」とし、「みんなが受け入れてくれたから」、「尊重してくれたから」、「色んな人によくしてもらって」と、スタッフや参加者との関わりを挙げた。組織キャンプの臨床的意義に、密接な対人関係があり(申崎ら, 2006)、Bの体験に類似する体験は一般の組織キャンプでも起こり得るだろう。しかしFGの原理には、スタッフが個人を尊重するPCAの価値を共有し、参加者を包含することで、参加者もこれらを内面化していくという点がある(ファミリー・グループ研究会, 2006)。これをふまえるとBはスタッフや他参加者から自身が尊重され、受け入れられたことで、自身も他者にこれを向ける様になったと考えることができる。この様に、無条件の肯定的配慮や共感的理解を向けられたメンバーが、他者に対してもそれを向ける現象は一般のPCAの個人対象のエンカウンター・グループに見られ(坂中, 2017)、この観点から、BはPCAのエンカウンター・グループの特徴的体験をしたと理解することもできる。

(2) 「人に会いに行っていた」

一方Eは、FGへの経年参加体験の全体を通じ「人に会いに行っていた」と意味づけた。この体験は中学以降、子ども同士でそれぞれの日常の話をするようになってから一層強まった。PCAの個人対象のエンカウンター・グループの意義の一つに、人と会うことそれ自体の価値がある(e.g., 森岡, 2020; 高松, 2020)。Eがこの様に、「人に会う」ことそれ自体の価値を体験した点からは、家族対象のFGにおいても、PCAのエンカウンター・グループの特徴的体験が生じると考えることができる。

(3) 経年参加家族との再会

FGをBは「もう一つの家族」と語り、それが強く体験された高校時代に、参加メンバーが概ね決まっていた点を挙げた。Bも「人に会いに行っていた」という語りの中で、同じメンバーが会うことの意味を語った。これらをふまえると、Bの「もう一つの家族」、Fの「人に会いに行く」という体験は、FGの方法そのものではなく、結果として経年参加者がそこに集まったことにより、もたらされたものと考えられる。これまでもFGの経年参加者の多さは示されてきたが(畠瀬ら, 1994)、それによってもたらされる意味は説明されてこなかった。組織キャンプは経年参加児にとって心理的居場所として内在化されると指摘される様に(木村ら, 2019)、FGでも結果として生じる経年参加が、参加者のグループやメンバーに対する、所属感や情緒的結びつきに影響を与える、という内在的な仕組みが挙げられよう。

また組織キャンプ体験はそもそも「もうひとつの家族」体験で、スタッフとの関わりから原家族が再現されるという指摘がある(申崎ら, 2006)。Bは他家族の父母と遊び、また他家族の父に相談をし、「あの人がうちのお父さんだったら」と憧れた。この様に「合同家族体験」として、他家族の父母と子どもとの間に「愛他的関係」が築かれることは、FGの意義とされてきた(畠瀬ら, 1994)。組織キャンプ体験が家族的体験を生むことに加え、Bの様に父子間に葛藤を抱えた子どもが、他家族ではあるが実際の父親との間で肯定的関係を持ったことは、その家

族的体験の質に、何らかの意味を持った可能性があるだろう。

(4) 自由な時間的枠組みと施設設備

中学以降特に、FGに「人に会いに行っていた」Eは、同年代の男女で夜中にスタッフルームで話をしたり、朝の4時まで「人狼（ゲーム）」をした。Eにとって「ただただ楽しかった」、この時間が持たれた背景には、FGの自由な時間的枠組みが挙げられる。更にこのエピソードの中では、夜中も話のできるスタッフルーム、皆で恋愛ドラマを見る為の設備、「恋バナ」や「怖い話」をするときにくるまった布団等、自由に使用できる施設設備が登場した。上保ら（1993）はFGを構成する要素を3つの観点から挙げたが、それ以外にも畠瀬（1987）は、自由度の高いFGに理解を示してくれる施設の重要性を述べた。自由にできる時間や、スタッフが常に誰か居り、交流のできるスタッフルーム、またその他の施設設備もFGを構成する要素であり、一連の体験を生む仕組みといえるだろう。

(5) 種々の習慣に内在する言語的コミュニケーション

Bは小5でいじめを乗り越えたエピソードの中、スタッフや他家族の親子との遊びの他、バーベキューで他家族の父等に相談をし、アドバイスをもらった体験を語った。FGは一般のエンカウンター・グループと比較した場合に、自然体験や遊び等の体験の非言語性が挙げられるが、エンカウンター・グループの言語的コミュニケーションで生じる自己開示とフィードバックが、FGにも存在する点が、この体験からは分かる。Bはこれを3日目夜恒例のバーベキューで体験した。FGを構成する、構造と呼べない水準の種々の習慣の中に、この様な相互作用が生じる点は、FGの仕組みを説明する上で意義があるだろう。

4. まとめ及び今後の課題

以上の検討から、次の知見を得た。1）参加者の特徴として、親が子育て開始以前にエンカウンター・グループに何らかの接点を持っている場合がある。2）FGは子どもにとって自身が深く受け入れられる一つの世界として生活に位置づき、日常の支えを生む。3）その元となるFGでの体験内容と、グループの内在的な仕組みとして、非日常的体験を生む環境設定と親子間へのスタッフの介在、自然環境下の子どもの解放的体験や挑戦と、行動を共にし、また種々の習慣をリードするスタッフの存在、他者尊重の態度の内在化や、人に会うこと自体の価値体験といったPCAのエンカウンター・グループの特徴的体験と、それを可能にする、経年参加者との再会、自由な時間的枠組みと施設設備、及びその中で持たれる種々の習慣に内在する言語的コミュニケーション等の要素がある。

今後の課題として以下を挙げる。1）子育て以前にエンカウンター・グループに接点を持っていた親の特徴と、FG参加に至るニーズの検討。2）PCAを体現するスタッフの具体的な働きの検討。3）3泊4日のグループと個人のプロセスや、周辺・施設環境の詳細を元にした、体験内容と仕組みの検討。4）親のFGの体験内容と意義及び仕組みの検討。5）分析におけるメンバーチェックの実施。6）FGが有する限界と課題の説明。

〈付記〉

日々、大変親身のご指導を下さいます、九州大学大学院人間環境学研究院の金子周平先生、この度、拙論をお読みいただき、ご指導を下さいました査読の御担当の先生、本研究にご協力を下さいましたBさんはじめA家の皆様、EさんはじめF家の

皆様に、心より感謝を申し上げます。

文献

- Anderson, D.A. (1974). The Family Growth Group: Guidelines for an Emerging Means of Strengthening Families. *The Family Coordinator*, 23 (1), pp. 7-13.
- Bukas Loob Sa Diyos (2023). an invitation to the family encounter. <https://www.bldnewark.com/family-encounter.html> (2023.8.23取得)
- ファミリー・グループ研究会 (2006). ファミリーグループ・スタッフマニュアル案1. (非刊行資料)
- ファミリー・グループ研究会 (2009). ファミリー・グループウェブサイト. <http://www.family-group.net/> (2023.8.23取得)
- 畠瀬稔 (1972). エンカウンター・グループについて—来談者中心療法の行動科学的発展—. 人間関係研究会資料, 4, pp. 1-10.
- 畠瀬稔 (1986). ファミリー・グループのこと. ENCOUNTER 出合いの広場, 人間関係研究会, 4, pp. 27-31.
- 畠瀬稔・稲田豊・奥田浩二・上保郁絵・瀧波志津 (1994). ファミリー・グループの研究—面接による追跡調査—. 研究助成論文集, 29 (2), pp. 94-103.
- 畠瀬稔・奥田浩二・上保郁絵 (1993). ファミリー・グループの研究 (1). 人間性心理学会第12回研究大会発表論文集, pp. 64-67.
- 上保郁絵・畠瀬稔・奥田浩二 (1993). ファミリー・グループの研究 (2). 人間性心理学会第12回研究大会発表論文集, pp. 64-67.
- 金森正臣・金森喜久子・浜本孝子・長谷川千里 (1995). 不登校児の親子の野外活動4. 愛知教育大学教科教育センター 研究報告, 19, pp. 67-75.
- 金子周平 (2018). エンカウンター・グループ. 矢澤美香子編. 基礎から学ぶ心理療法. ナカニシヤ出版, pp. 254-265.
- 木村能成・那須里絵・西村馨 (2022). 児童・思春期の子ども達を対象とした野外キャンプの取り組み. 日本集団精神療法学会第36回大会抄録集, pp. 66.
- 串崎真志 (2001). 心理的支えに関する臨床心理学的研究. 風馬書房.
- 串崎真志・望月直人・永井知子 (2006). キャンプ療法. 中田行重・串崎真志 (編). 地域実践心理学. ナカニシヤ出版, pp. 23-37.
- Laqueur, H., La Burt, H., & Morong, E. (1964). Multiple family group therapy: Further development. *The International Journal of Social Psychiatry*, 10, pp. 69-80.
- 水野行範 (2011). エンカウンター・グループ再考. 伊藤義美・高松里・村久保雅孝 (編). パーソンセンタード・アプローチの挑戦現代を生きるエンカウンターの実践. 創元社, pp. 123-134.
- 森岡正芳 (2020). 他者と出会うこと—エンカウンター・グループの持続する時間. 人間性心理学研究, 38 (1), pp. 23-28.
- 村山正治 (1977). エンカウンター・グループ: 序論. 村山正治 (編). 講座心理療法7エンカウンター・グループ. 福村出版, pp. 11-22.
- 人間関係研究会 (2023). 人間関係研究会について. <https://encounter-group.jimdo.com/%E4%BA%BA%E9%96%93%E9%96%A2%E4%BF%82%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/> (2023.8.23取得)
- Rogers, C. R. (1970) Carl Rogers on Encounter Groups. Harper & Row, Publishers, Inc. 畠瀬稔・畠瀬直子 (訳) (2007). エンカウンター・グループ人間信頼の原点を求めて. 創元社.
- 坂中正義 (2017). エンカウンター・グループ. 坂中正義 (編著). 田村隆一・松本剛・岡村達也 (著). 傾聴の心理学PCAを学ぶ: カウンセリング/フォーカシング/エンカウンター・グループ. 創元社, pp. 109-142.
- 高松里 (2020). 時代の変化とエンカウンター・グループ、そして変わらぬもの—人間関係研究会第二世代として. 人間性心理学研究, 38 (1), pp. 7-13.
- 植村勝彦 (2007). コミュニティ心理学とは何か. 植村勝彦 (編). コミュニティ心理学入門. ミネルヴァ書房, pp. 1-22.
- Yalom, I.D. (1995). The theory and practice of Group psychotherapy, 4th ed. New York: Basic Books. 中久喜雅文・川室優 (訳) (2012). グループサイコセラピー理論と実践. 西村書店.

A Study of the Experiences of Children Who Participate in Family Group over years and Its Intrinsic Mechanisms: Focusing on Daily Support

Nobutaka NIIMURA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Nanako KOGA

School of Human and Social Sciences, Fukuoka Prefectural University

This study focused on family group in Japan, a family encounter group during the child-rearing period, which provides daily support for the children who participate in the group over years. The purpose of this study was to gain insight into ①the characteristics of the participants, ②the characteristics of the daily support, and ③the content of underlying experiences and the intrinsic mechanisms of the group, which would contribute to understanding of this group from a viewpoint of clinical psychology. ①Parents may have had some contact with the encounter group before they started parenting. ②This group is positioned in the children's daily life as a world where they are deeply accepted, which functions as daily support for them. ③The content of underlying experiences and the intrinsic mechanisms of the group including: setting of an environment that creates extraordinary experiences and the intervention of staff between parents and children; the liberating experiences and challenges of children in the natural environment and the presence of staff who act with them and lead various customs; the internalization of an attitude of respect for others and the experience of the value of meeting others, which are characteristic experiences of person-centered encounter groups; and factors that allow it, such as reunification with long-term participants, the free time frame, facilities, and the verbal communication intrinsic to various customs that are formed in the group.

Keywords: family group, encounter group, person-centered approach

